

特集テーマ設定にあたって

加藤 理

東日本大震災と子ども社会

2011年3月11日に発災した東日本大震災は、東北地方太平洋沖で発生した地震に伴って発生した津波と、津波によって惹き起こされた原発事故、そしてその後の広範囲にわたる余震によって惹き起こされた史上稀に見る大規模地震災害であった。多くの子どもたちも犠牲になり、行方のわからない子どもたちの捜索が今でも続けられている。

津波や激震から逃れることができた子どもたちも、さまざまな震災の影響に苦しんできた。親を喪って震災孤児になった子ども、故郷を捨てて他郷に暮らすことを余儀なくされた子ども、家を失って仮設住宅に暮らす子ども、友だちと別れて転校しなければならなかった子ども、近隣に遊び場を失った子ども、高い放射線量のために屋外での遊びや行動を制限されている子ども、進学・就学を見直さざるをえなくなった子ども、学習環境を奪われて不利益を被っている子ども、校舎を失くしてプレハブ校舎で勉強している子ども、フラッシュバック等の震災ストレスに苦しむ子ども、等々、その影響は計り知れない。

日本の子どもの社会と文化について学際的に研究する子ども社会学会にとって、東日本大震災によって子どもたちが直面しているさまざまな現実や苦悩を直視し、複数の領域による学際的なアプローチによってその問題に迫ることは、本学会が果たすべき使命ともいえることである。

2012年に國學院大学で開催された第19回大会では、公開シンポジウム「東日本大震災『子ども・子ども社会支援を問う』」が開催され、東日本大震災下における子ども支援について広く議論が展開された。引き続き開催されたテーマセッションにおいて、「震災と子ども社会の研究」シンポジウムの中で浮かび上がった問題点について議論が深められた。

これらのシンポジウムとテーマセッションが開催されたのは、子どもと子ども社会に真摯に向き合う学会の一つとして、東日本大震災という未曾有の災害と、その中で子どもたちの苦しみから目を背けることなく、さまざまな研究領域の知見によってそれらと向き合うことを自覚的に行っていこうとする本学会会員の意志が強く働いた結果である。

日本子ども社会学会紀要『子ども社会研究』では、以上のような本学会が果たすべき使命と、震災後の子どもの問題への多くの会員の真摯な取り組みを鑑み、「東日本大震災と子ども」を特集テーマとして掲げる。

被災した子どもたちが震災によってもたらされたさまざまな問題から立ち直るまでには、長い年月を要することが考えられる。復興途上にある子どもたちの支援のためにも、本学会の特色である多様な研究領域から、震災と子どもについてアプローチする。